

# 先人の足跡

ふたばの山とたけのぼり



新湊市立塚原公民館



## 先人の足跡

春の野に立たずんで、ゆらゆらと立ちのぼる陽炎の中に、土の香りを感じる時、ながい歴史の流れで、土地を守り育てた先人の生き方が、地名と共に映し出される様だ。

多かつた沼や水辺を埋めて農地を広げ、土手を積んでは洪水の氾濫から田を守り、自然を相手の暮しの中から親しまれた地名にその息吹が感じられる。

先人の信仰は又格別で、天災を受け不安の日々は仏を祈り、大豊作や家事の喜びを神前に捧げて祭りした様はふるさとに数多く残る社寺の跡からも伺い知れる。

朝は朝星、夕べに夜星と称せられる苛重な人力労働の中から豊さを求めて築いたふるさただ。そして又美しくも厳しい自然風土で培われた粘り強い勤勉性が土と共に生き、助け合い、融通し合いの村の風習が、総手の力で今日の見事な美田に出来上り、高度な生産力となって受けつがれている。

## は じ め

昔から、たんぼは殆んど通称（字名）で呼ばれていた。

「あんま、へらすま（昼寝）すんだら、八十刈の水見てこいや、戻りに下田の水口も止めて来てくれや」、七月半ばおやじが中飯の終わった頃、決して息子に困廻りを言いつけた。これは、つい二十年前頃の農家の日常会話であった。数百年前から呼び馴れた田甫の地名（小字）が耕地整理によって、すっかり姿を消してしまった。我々の「ふるさと」塚原地方には七つの大字と、その中に又百数十の「小字」や浴名があった。細長く曲りくねったものや三角五角など形は様ざま、地積も一坪（三、三平方米）ぐらいから三百六十坪（一反歩）と複雑多岐でユーモラスな地名と形の中にも情緒があった。

この懐しいふるさとの地名を後世にのこそうと公民館学習委員から、「ふるさと地名発掘学習第二号」として資料発表され、「ふるさと小字たんぼう記」として編集しました。

（編者）



## 鷹討ち田（寺塚原）

この鷹討ち田には変った伝説が語り継がれている。

今から千二百八十五年前、大宝元年二月二十七日の出来ごとである。その頃北陸七道の大主、佐伯越中守有若左エ門尉有基の末裔で佐伯有頼が日頃可愛いがっていた鷹（ヒヨリ丸）が突然山の彼方へ翹び去った。これを見ていた有頼の妻が夫に知らせた。有頼は弓をもって鷹の後を追い捜すこと、いつ時あまりようやく遙るか小高い木の枝に羽を休めている鷹を見つけた。有頼今ぞと弓に矢をつがいて放さんと狙いを定めた。その時突然前方に大熊が現れ有頼に近づいた。これは一大事とその矢を熊に向って矢を放つ矢は見事に熊の腹を射抜いた。慌てた鷹は大羽を広げ熊を道案内するかのようにはなつた熊を導びき東方の彼方へ消え去った。有頼は熊の血こんを、たどって七日七夜捜

し歩いて辿り着いた所は山の麓の大きな洞穴であった。中を覗いて見ればまばゆいばかりに光を放つ「弥陀」「不動」の二尊が穏やかな顔で立っておられる驚いた有頼は、その場で地に伏し鷹と熊の姿は御仏の化身であったことに気がついた。悲嘆の涙にくれた有頼、己の髪を断ち切り大罪を許し給えと、ひれ伏し、ざんげの心を二尊に示した。やがてその地に庵を建立して深く帰衣したと伝えられる。

今の立山町芦峯寺の立山権現の祖とも云われ、立山開山の基いとなった。芦峯寺には今も佐伯姓が多く、寺塚原の佐伯一族も往時の同族と語りつがれ、広大な狩場のロマンが鷹討ち田に秘められ悠久の歴史が感じられる。

## 神楽川（沖塚原）

古くから農民は隣村と水争いが絶えなかった。用水、排水は農民の命でありその年の収穫を左右した。

沖塚原の東方を流れる神楽川は、今から二百年位前、赤井村（大島町）のお宮の境内から湧き出でる水が源流とされ、大島、塚原、牧野の各村を経て放生津の内川へと流れた。完成を機に四日曾根（放生津）の二上大権現の神楽が近くの橋上で奉納された以後、神楽川と名付けられた。

布目、沖塚原、朴木、金屋にとって重要な排水路である。水量も豊富で昭和二十年頃まで長舟が往来し物資の運搬水路としても十分にその役割を果たした。その後、数度に亘って改修され今は昔の面影はなく、国営排水路として名残りを留める。

## 天神堂（朴木）

昔は各部落に大小さまざまなお宮が数多くあった。地蔵堂、天神堂のたぐいは無数に点在し、それぞれに故事米歴がある。

朴木の東方の地に天神様を祭る小さな祠があった。朝な夕なに村人がお参りし、五穀豊穰から賢い子の授かりまでお願いし平和な毎日が続いた。

或る日、突然ご神体がなくなっていた。評判を聞き手近に御利益を授かろうと持ちさったことか。村の衆は八方総手でさがしたが……。

村の一人が私に夢のお告げがあった神様が遠く呉羽方面にいる、早く帰りたいといっておられると。こんな事件から村人は心配し、今のお堂が小さくお気に召さないのだろうか。村の衆が集り相談の結果、今度は大きなお宮にお移ししてはどうかと話しが纏まり、神明社に合祀されて、ご神体が落ち着かれた。おかげで又豊かな毎日が続いて

いる。跡地は今は天神堂の地名で聖地として後の世まで語りつがれ親しまれている。

## 浜街道（松木）

浜街道、その名の通り海から上方に向う道であった。この地方は大古から大湿地帯であり、又射水川の氾濫等で流れの形が、何本も水路となって海に向かっており、路肩が土手の形であり巾の広くない道として併走していた。

この浜街道も放生津から松木、寺塚原を経て大門、中田、井波に通ずる当時の大事な生活路であったと思われる。

山の方から木炭や芋、絹織物、海から塩、魚干物等米の運搬商人、旅人が利用した直通の一本路であった。

## 柳橋やなぎばし（松木）

寺塚原との境を用水、排水等を挟んで柳橋の地名がある。水路の兩岸に長く多くの柳が生い茂り、その枝を倒したり、又小枝を伝ってどこからでも対岸に橋がわりに渡れたという旅人や農夫に重宝がられたという箇所である。

## 大法寺（川口、宮袋入会地）

この地に広大な寺域を誇った大法寺も慶長十四年（一六〇九）前田利長が高岡城築城と町づくりのため各地から多くの寺とともに、高岡へ移転させられた。

当時の城下町は、本丸城を中心に四方八方の拠点に寺が配置され、出城的役割を果たしていた。武器食糧の保管、一朝事には兵士の移動集結、隠れ場所として重要な戦略基地として利用された。



転出した寺跡は逐次開田され、大法寺の地名はそのまま小字として、川口から寺塚原領域まで残っていた。

注……塚原地区で只一箇所の入会地。

## 弘法茶屋（坂東）

弘法茶屋は今の新湊庄川線の県道沿にあった。「宮の下」と云う人が江戸時代の末期から代々往來を行き来する人々に、お茶やダンゴを接待する茶店であった。その頃は放生津から大門まで二里（今の八軒）で只一軒の茶屋であり、旅人の休み所として親しまれ賑わった。今もその跡に沢村家が現存している。

その頃の沿道ぞいには、樹叢や背丈もある葦の原に「狐」や「もぢな」がいたり、北野の淵に川うそが出たり、夕ぐれになると連待ちの旅人が集

まっては夜道をいそいだとか……。



北野の水車

中曾根

金屋

# 塚原地区小字場所図



「くて」とも読み  
低くして沼の如くなるの字意

神田

境





上牧野

能町

坪

新京

古村

宮袋

七口

沖二

改修住民四十戸  
他へ移住

冷田

西一

八十刈

川田

加治

庄

渡し舟

川

芝

千

柏

古敷屋

川口

松木

文

二本杉

川除

石瀬

西領

五呂

角田

善京

柳橋

大田

お寺あと

坂東

弘法茶屋

大宝寺

横枕

法楽

法楽

一本杉

午目

浜

街

道

五茂

沖

丸野

寺塚原

角無

鷹打つ田

白寄

中野

# ◆寺 塚 原

小 字	俗称地名	故 縁
境 しろ 白	よせ 寄	
丸	かわ ぎ だ 川 木 田	庄川がよく氾濫、流木や雑土が積り出来た所。
〃	稲 荷	約700年前京都の稲荷神社とゆかりのあるお社があった。
〃	古 宮	800年前多く神社があった場所で、今の寺塚原神社もそこから現在地へ移転した。
〃	大 法 寺	この場所に多くの寺が建っていたが、戦国時代焼失や移転がつづいた。
かど 角	なし 無	
うまの 午	め 目	浜 街 道
〃	雪 降 ら ず	四尺巾の生活路で放生津浜から松木～寺塚原～中田砺波へ通ずる街道であった。
〃	横 枕	部落の北側にあり1町歩ほどの田んぼが沸水が出て最冬でも雪が積らない。
〃	かみなる 雷	じま 島
雷		雷が鳴るとよく落ちる場所で、いつも田んぼに焼あとが見えた。
いっ 五	おさ 箆	舟 川
千	目	新 保 寺
〃	蓮 池	お寺のあった場所で、こんな場所が寺塚原に多かった。
〃	連 池	新保寺の周囲ぐるりは美しい蓮の花咲く池で（現土地改良工事に蓮の根が出て来た）あった。
ぜん 善	きよう 京	たか どう まる 高 堂 丸
		高堂丸という説教者が説法したお堂のあった場所。

小 字	俗称地名	故 縁
はろ 法 六 五 五 淋	らく 楽 反 反	

### ◆沖塚原

川 杉 六 法 一 本	向 畑 反 楽 杉	
----------------------------	-----------------------	--

### ◆朴木

よし 吉	ま 間	堀 田	
		天 神 堂	川合流台地で石仏、祠、お社、説法岡があった場所
袋	田	道 尻 なか さ 中 沙 木	隣領地境界で入り込んだ田が多い
フ	ケ	白 山 亀 作 里	
		フケの方	潟につづく湖沼入江を開田したと思われる低湿地であったタニシの宝庫



小 字	俗 称 地 名	故 縁
あら 新	た 田 堂 間	
神 楽 川		地内で川巾 15 m のところもあり鯉、フナ、ナマズ、ウナギ、ガツッポ、シジミなどが捕れ、笹舟等の利も多かった。
前	田 神 明	開村のころから農、漁、信仰と地を得た場所
"	河 田	
"	なか 中 よう 屋	
水 久 保	流	川口、宮袋間の庄川の流れて大洪水に濁へ流れていた跡地
"	やまん 山 た 田	
"	四 反 田	松木部落と堅田の開拓をなし朴木領となる。
しや 捨	み 見 よろい 鎧 み 見	
"	なかん 中 さ 佐	
"	杉 ノ 下	
砂 取 場		大昔の射水川の洪水の推積地一面 20 cm 下は良質の青粘砂で土間用、壁、住居用に掘り取られていたところ
在 家	お ぼ く でん 御 仙 供 田	社寺の領有地があった。
"	べつ とう 別 当	
東 在 家	そ り だ 総 利 田	
さ 三 か ケ てん 天 だ 田	上 三 ケ 天	下三ヶ天、茨ノ木
どう 道	野	
"	法 話	

## ◆松 木

小 字	俗 称 地 名	故 縁
中 坪	深田、堅田	<small>こべじま</small> 肥島
五 月 田		
宮 田		社領の土地
ひ 日	お や す	<small>ながさ</small> 長砂
中 鹿	石 の 爪	<small>ぎょうぎ</small> 行基、菩薩の祠地
折 口	二 十 刈	<small>きたはざま</small> 狐塚、北狭
沖 田	飯 田	小さな田んぼが多かった
大 ノ 田	三 十 刈	<small>やなんばし</small> 柳橋、洗測
<small>あぶみ</small> 鑑	六 十 刈	<small>くろした</small> 黒下
川 田	大 神 宮	<small>ごひようがり</small> 五俵刈、立野割、古屋敷、 <small>しおから</small> 塩辛
<small>かわ</small> 川	神 明	権九郎

## ◆川口、宮袋入会地

沖 二	二 番 割	東一番割、黒下、加茂作り
七 口	い 江 成	中割
八 十 刈	三 十 刈	<small>ちようだ</small> 能登田、 <small>したんだ</small> 丁田、長田、下段田
柏	柏 島	院内（中世期の月光寺境内あと）
加 治		
芝	<small>こし</small> 腰 <small>まえ</small> 前	
五 呂	五 呂 入	

小 字	俗 称 地 名	故 縁
二 本 杉 新 京 古 村 大 法 寺 冷 田 坪 西 領	ど う 道 し ん 神	現在の庄川左岸地  大法寺院の趾地  川口の南方で中世期頃住居の中心地

## ◆坂 東

すみ 角	だ 田	角 田 割	村の北角にあたり肥沃地
		一 本 杉 割	畑地で新保という坊さんが住んでいて、別名新保ともいう大きな杉の巨木が一本あった。
		砂 瀬 川	砂瀬と中砂瀬とある良質田
		おたやしき割	住居あとを開き、大きな杉林の附近で落雷がよくあった。
		か ぎ 田 割	鉤の様な形の田が多い瘠地
		てんこ割	てんこを使って水を充てた所
		諏訪神社	寺塚原地内に坂東の諏訪神社が建っており、毎年坂東が1日寺塚原が半日大祭のお参りをする。
		集 団 墓 地	寺塚原地内に集団墓地が残されている。



# り 今、昔

1反……………330㎡

1俵……………60kg

昭和初期 ~ 約40年前ぐらい	現 在
レンゲ.生石灰.大豆粕.にしん粕.堆肥.化学肥	微量要素入り高度化成
牛.馬で犁おこし(1日2.5反)	トラクター(1日9反)
牛.馬用碎土機	
保温折衷苗代(温床紙上床)	室内育苗(箱入苗)
田植機(1日4反) 6月始めより	乗用田植機(1日12反) 5月始めより
1条、2条手押除草機(1日2.5反) 田ならし	除草剤散布
BHC粉剤.ホリドール粉剤.水銀剤	殺虫、殺菌、混合剤
バインダー(1日2反) 9月末から リヤカー.テラけん引	生脱コンバイン (1日6反) 8月末から
栗はさ木かけ(8日間)	
動力脱穀機(1日3反)	軽自動車 火力乾燥機 (1日6反分)
発動機.イワタ籾すり(1日30俵) 千石.万石.米選機	新型自動パールメート 機(1日100俵)
精米機(1日7俵)	自動研磨精米 (1日20俵)
約6俵	約10俵

# お 米 づ く

作 業 別	明治末・大正期 ~ 約 80 年前くらい
肥 し	下肥・石灰・糞がら等少々
田 起 し	株割り(手打ち)・三つ鋤・四つ鋤 (1日に0.5反)
土 く だ き	足ふみ又は鋤で小切り
苗 代	水面種糞まき
田 植 え	手植え(1日0.7反) 縄定規・コロガシ定規 7月始めより
草 と り	平鋤で打返し(1日1.5反)・手草とり
虫 や 病 菌 駆 除	メイ虫の藁抜きとり・ウンカの小網すくいとり ウンカ・株間の水面に石油滴し・病菌処置なし
稲 刈 り と 運 搬	手鎌で(1日0.5反)・10月末から 肩荷捧(男)・背担ぎ(女)
籾 干 し	はんの木架場かけ(10日間)
籾 と り	千刃こき(1日手こきで0.3反) 足踏機 (1日 1反)
籾 す り	土ウス(1日5人がかりで10俵) 千石・調製
精 白 米	唐うす(足つききねで1日1俵)
反 当 収 量	約4俵

# お米相場の歴史

古代万雑相場資料

米1石(150K)代金で今より206年前(百文を約老銭兩替計算で表わす)

年号	米 1 石	年代や歴史
天明元年	円 銭厘 40	
寛政元年	38	118代光格天皇年
享和元年	42.6	
文化元年	30.6	ナポレオンイム皇帝になる
" 6年	24.8	日本全国人口25,517,729人
" 10年	51.3	婦負郡農民の暴動起る
文政元年	38.9	119代仁孝天皇越中鐘釣温泉発見
" 12年	88.8	黒部川の大洪水あり
天保元年	74.4	富山町大火で9,000戸焼失
" 3年	69.2	越中総生産高220万俵(4斗入り)
" 7年	1 51.5	申年で大キキン
弘化元年	97.9	
嘉永元年	88.3	120代孝明天皇年
" 3年	1 66.5	
安政元年	98.9	ペリー再来
" 2年	70.7	江戸大地震で死者100,000人
萬延元年	1 98.6	桜田門外の変
文久元年	1 62.5	
慶応元年	3 55.8	ビール始めて越中へ出現
明治元年	4 23	お金紙幣始めて出る
" 8年	5 30	大水害の凶作年



年 号	米 1 石	年 代 や 歴 史
明治16年	万 円 銭 厘 3 20	天気予想開始される
" 27年	6 66	日清戦争
" 35年	12 40	庄川改修工事始まる
" 37年	11 60	日露戦争
" 45年	21 60	明治天皇崩せらる
大正元年		
" 8年	49 50	全国的米騒動起る
" 12年	32	全国人口55,963,503人、関東大震災
昭和元年	30	東京に地下鉄出来る
" 5年	15 12	ロンドン軍縮会議
" 7年	21 50	上海事変
" 13年	33 90	国家総動員法出る
" 16年	49	米の供出割当制度
" 20年	300	終戦となる
" 21年	550	新憲法
" 22年	1,801	天皇陛下陛下をご巡幸
" 23年	3,751	
" 25年	5,500	ジェン台風、千円札発行
" 36年	10,422	富山新港の開港
" 46年	20,940	米の生産調整に入る
" 49年	31,800	
" 51年	40,913	天明元年の米価の10万倍である
" 60年	47,680	全国人口12,140万人

# 塚原村の旧高及び年貢米

区分 部落別	旧高	年貢米				昭和20年農地開放前 摘要	明暦2年 1656年
		年貢米	原租	差引納入米	石		
寺塚原	2,500	斗 8,370	斗 522	斗 7,848		1,182	
		石 8,400	252	8,148			石 1,196
朴木	500	9,550	400	9,150		464	
松木	1,145	8,450		8,450		1,058	
川口	1,100	9,650		9,650	+7升 キメ米	1,149	
宮袋						813	
計	5,245					5,862	

## 塚原地区字廃止経過

一、昭和二十九年三月一日

川口宮袋入会地圃場整備事業に着手

昭和四十二年十月

同地区工事完了し、換地処分等同時に字廃

止登記完了

一、昭和四十三年四月一日

塚原土地改良区（寺塚原、沖塚原、朴木、

松木、坂東）圃場整備事業に着手

昭和五十一年八月

同地区工事完了し、換地処分等同時に字廃

止登記完了

編纂委員長 金正男

調査委員長 大西友次郎

調査委員

赤壁 勇 高井恒秋

塚本 進 帯刀嘉之助

松波善三 村田松太郎

長堀秋三 武田敏

木田郁夫 松浦秀雄

高信佐一 小田良一

調査事務局

公民館長 村西啓二

事務局長 塚本喜作

主事 大村栄子

昭和六十年度ふるさと発掘学習第二号

先人の足跡（ふるさと小字たんぼう記）

印刷発行 昭和六十一年四月

編纂発行 新湊市立 塚原公民館

印刷所 明野印刷所